想像上の「郷里（ホーム）」とバイカルチャー
―トランスナショナルな移住と日系ブラジル人家族―

名古屋市立大学大学院人間文化研究科博士後期課程生
ヤノ・パトリシア[1]

輸送技術と通信技術の飛躍的発展によって国境を越えるのは容易になったが、民族における文化的差異は依然としてなくなっていない。トランスナショナルな移住（transnational migration）はグローバル化の影響を受けて発展した移住形態である。この移住を経験している移民は二つ、あるいは三つ以上の国との関係を同時に維持し続けることができる。この移住では、移住者はある国を自分の「郷里（ホーム）」として、帰国と再移住を繰り返し、いつの日か「郷里（ホーム）」に永住することを望んでいる。

日本に在住している日系ブラジル人[2]の家族も、このトランスナショナルな移住を経験している。彼らは、ブラジルと日本との間で生活をし続けて、「郷里（ホーム）」のブラジルにいる親戚や友人との関係を守っている。しかし、こういう移民は彼らにどんな影響を及ぼすのであろうか。「郷里（ホーム）」は心がいるところであるとするならば、トランスナショナルな移住を経験している人の「心」はどうなるのだろうか。

トランスナショナルな移住はポジティブな面とネガティブな面の両方を持つ。ポジティブな面としては、新たな文化を経験して、さまざまなことを知ることで視野を広げることが可能になる。言語はその新たな知識の一つであり、新しい言語を取得することは自己満足感や職業に良い影響を与えると考えられる。そのため、バイカルチャーやバイリンガリズムは多くの研究者から支持を受けている。ところで、一般的に言えば、日本に住んでいる日系ブラジル人の移民はこのようなバイカルチャーやバイリンガリズムには進まない。日本に住んでいる日系ブラジル人は、「日本国内のブラジル人世界」に隔離されており、ブラジル人仲間との関係が主になっている。他方、彼らはいくつかの理由（時間の不足、日本文化に対する偏見、動機の欠如など）で日本語を学ばないし、日本人との交流も行っていない。

日本に住んでいる日系ブラジル人はいつの日か帰国することを希望しているが、この目標を何回も延長して、結果的に日本に永住する日系ブラジル人も増えている。さらに、彼らは想像上の「郷里（ホーム）」を持っており、「デカセギ・アイデンティティ」を形成している。したがって、日本に在住している日系ブラジル人は、ブラジルにいる日系人とは区別される新たなマイノリティとして考えなければならない。

> 私たちは、一五年前に日本へ来ました。その間、何度も帰国と再移住を繰り返してきました。……両親が年を取ったら、私が彼らの面倒を見なければなりません。父は、年を取ってからは、ブラジルと日本との間で生活をすることができなくなります。これが私たちの不安です。
>
> （A君、一五歳、男子、日系三世）

日本に在住している日系ブラジル人は、帰国をすると、ブラジルで再適応するための様々な問題に出遭う。プロフェッショナル・ギャップ[3]、日本とブラジルの収入の格差、帰国前に日本の公立学校に通っていた子どもがブラジルの学校で再適応しなければならないことなど、これらの要因が日系ブラジル人家族のブラジル

での再適応の失敗と、その結果としての再来日に最も影響していると思われる。これらの問題が生じる原因の一つは、彼ら日系ブラジル人が将来「どこで、ずっと」生活をするかに関して不確実な状態にあるためと考えられる。その結果、問題解決法として彼らの多くは、帰国・Uターンを繰り返すいわゆるリピーターと呼ばれる移住形態をとっているのである。

彼らは日本に住んでいる間、日本の社会に統合しようとせず、子どもたちにも同じような傾向が見られる。両親の社会保険や子どもの進学にも、これから焦点を当てなければならない。両親は、いずれブラジルへ帰国することを目指しているので、社会保険を必要と感じていない。日本にあるブラジル人学校に通っている子どもは、初等教育を卒業した後、日本にある生産工場で仕事を始める。さらに、中等教育を終えても進学のために帰国をせず、生産工場で仕事を始めることが彼らに見られる傾向である。また、日本にある公立学校に通っている子どもの場合、両親がこの子どもたちの勉強・宿題などの手伝いができないため、加えてダブル・リミテッド[3]の問題が影響しているため、日本の高校や大学への進学は難しくなる。

日本人のネガティブな面はブラジル人に対する差別や偏見です。日本人は、ブラジルのことを知らないので、いろんな偏見を持っています。例えば、ブラジルには冷蔵庫、テレビや車があるかと聞かれたことがあります。日本人は、ブラジルはアマゾンだけだと思っています。この考え方は、偏見にとらわれています。……私は日本語が分からないので、日本人の友達を作るのは難しいです。私には彼ら(日本人)が何を言っているのか分かりません。彼らの考え方も分かりません。

(B君、一二歳、男子、日系三世)

日本に在住している日系ブラジル人家族を巡るもう一つの問題は離婚である。彼らの間では、離婚している夫婦は珍しくない。このような状況下で、彼らの子どもたちは再び新たな悩みに直面することになる。この不安定な状態は、日常生活における問題の解決能力に悪影響を与え、家庭内関係を混乱させる。

両親は離婚すると思います。母はうつ状態で、夜よく眠れません。私と母が教会へ行き始めてから、気分的に大分よくなりました。しかし、父は教会には行きたくないし、もう家に泊まっていません。母は私たち(彼女と弟)のせいで(父が)家に泊まらなくなったと言ってます。それは、私たちが家で大騒ぎするからです。とにかく、両親のことが心配です。

(Cさん、一二歳、女子、日系三世)

このように不確実な状態で生活することは、日本に在住している日系ブラジル人の将来にネガティブな影響(過剰な不安など)を及ぼしていると考えられる。しかし同時に、この生活状態にはある程度不安を低減させる働きもある。この想像上の「郷里(ホーム)」で生活をすると、将来に関する責任感や苦労から逃避して、心理的な健康を保つことができるからである。

ブラジルへ帰国をしても、ブラジルでどんな仕事をするのか不安です。それで、少なくとも、これから一〇年間は日本で過ごすことになるでしょう。それで、息子(八歳)を日本の学校に通わせることに決めました。しかし、いつか必ず帰国をするつもりです。日本でずっと生活をすることは考えていません。彼が大人になったら、ブラジルか日本か、どこでずっと生活をしたいか彼自身が決めればよいと思います。

(Dさん、三〇歳、女子、日系三世)

日本に在住している日系ブラジル人の子どもたちは、両親の不安をかかえていく。彼らは、現実的な「郷里(ホーム)」

のない生活を送っていて、アイデンティティの混乱を経験する。加えて、この不確実な状態は、彼らの将来目標に影響を与え、その結果彼らには日本でブルーカラーとしての仕事を選択する傾向が見られる。両親と同じように、彼らの夢や将来に対する目標は徐々に先延ばしされて、やがてはその夢を無くしていく。また、移民青少年の場合、「二重推移」[5]を経験していることも考えるべきである。

勉強については、日本人にしかできないことがあります。私には、勉強を続けたくても、とても難しいです。(かりに私が)日本人だったら、自分の夢を叶える可能性は高いと思います。……どこまで勉強を続けられるのか。大学を卒業できるのか。帰国をして、ブラジルの学校に入って、勉強について行けるのか。これらの不安を持っています。勉強をあきらめて、工場で仕事をすることも考えました。しかし、ずっと工場で仕事をしたら、それで満足できるのでしょうか。私はそれで満足できるとは思いません。ずっと自分の人生を生産工場で過ごしたいとは思いません。

(Eさん、一四歳、女子、日系三世)

このような想像上の「郷里(ホーム)」を持って、不確実な状態で生活することは精神的に不安であろう。おそらく、この不安が将来に対する目標確定の支障となっているものと思われる。移住を決める際に、それが家族の健康にどんな影響を与えるかを考えなければならない。移民することによるメリットとデメリットをはっきりと家族で確定する必要がある。日本に住んでいる日系ブラジル人の場合、ずっと日本で生活をするのか、あるいは一時的な滞在であるのか。一時的な滞在と決めたならば、いつからいつまで日本で生活をするのかをはっきり決める必要がある。

トランスナショナルな移住のポジティブな面を活かすためには、バイカルチャーと家族支援を促進することが重要である。日本に在住している家族と彼らの子どもたちを対象に、「社会的スキル訓練[6]」を施すことによって、彼らの文化的、社会的能力を高めて、「バイカルチャー・コンペテンス[7]」を促進することが一つの方法である。家族の社会的能力を促進することによって、家族関係を良好なものとし、家族の「コーピング能力」を高めることができるからである。さらにこれらを基にして、異文化間コミュニケーション能力にも良い影響を与えることができると思われる。

他方、日本に在住している日系ブラジル人の事情に通じている教師(ブラジル人の子どもを教えている日本の公立学校の教師とブラジル人学校の教師)や政府などによる支援は、これら二つの世界での生活をよりよいものにするために重要であることは言うまでもない。これらの問題を解決することが、これからの我々の課題であると考える。

(注)

(1) 心理カウンセラー。岐阜県美濃加茂市にあるブラジル人学校(SEBS)の教師を勤める。

(2) 現在、日本では三〇万人以上の日系ブラジル人が在住している。この移民は、一九九〇年六月(改正入管法施行)以降促進され、今まで続いている。

(3) 日本に長い間デカセギをした後帰国したが、ブラジルの社会的経済的背景が変わっているため、専門職としての知識・技術・経験が時代遅れになることを意味している。

(4) 日本語とポルトガル語における日常的会話の言語能力を持つが、授業についていくための言語能力が不足している者をさす。この問題は特に、初等教育を受けているうちに転校を経験している(日本学校・ブラジル人学校に通う)移民の子どもに見られる問題である。

(5) 異文化間心理学では、移民の第二世代の青少年は「二重推移」を経験していると

いわれる。それは、彼らは、思春期に経験する心理的・身体的推移と文化的適応に関する適応や推移を同時に経験しているからである。

（6）アメリカで移民が集中している地域（特にヒスパニック系）では、移民を対象にさまざまなスキル訓練が行われている。この訓練の結果として、非行、麻薬中毒、休学などの問題が低減している。これらの訓練プログラムとしては、次のようなものがある。*Structured Learning Therapy* (Reed, 1994), *Bicultural Skills Training* (La Fromboise & Rowe, 1983), *Bicultural Effectiveness Training* (Szapocznik et al, 1986), *Bicultural Skils Training* (Schinke et al, 1988), *Family Effectiveness Training* (Szapocznik et al, 1986), *Familias Unidas* (Coatsworth et al, 2002), "Entre Dos Mundos" - *The Parent-Teen Biculturalism Project* (Bacallao, 2005), *Bicultural Competence Skills Program* (Schinke, 1988)。

（7）二言語能力のこと（日本語とポルトガル語を共に話す能力）。

（8）ストレス・マネジメント能力である（Coping）。